
仮面ライダーウエイブ

ウェーバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーウェイブ

【Nコード】

N7325Z

【作者名】

ウェーバー

【あらすじ】

ある一人の少女『磯貝七海』いそがいななみは家族全員から虐待を受け、辛い日々を送っていた。
ある一人の少年『大洋海翔』たいようかいと彼の家族は誰一人血が繋がっていないかったが幸せに暮らしていた。

ある時七海は高校受験の帰りに異世界から来た怪人『ウォーマ』に出会い襲われる。しかし、そこに海翔が現れてウォーマを倒すのだった……

そして海翔と七海の出会いはいの運命を良くか悪く変えていくの
だった……。

尚、この小説はエブリスタにも投稿しています。

波の戦子 ウエイブ

1月1日 AM 3:00

ここは日本の何処かの架空の街『うみより海頼』のすぐ側にある『海頼海』の浜辺。

1月と言っせいもあり冷たい風が吹きつけていて、とても寒く、誰もいないが……………

そこに銀色のオーロラが現れたそして誰も居なかったはずなのに黒い服を着た青年がいた。

1月18日 AM 8:00

海頼

「大変!……大変!」と言いながら無我夢中で走っている少女がいた。

黒い髪をポニーテールにくくり制服を着て、スニーカーを履いた足を一生懸命に動かしているこの少女の名は『磯貝七海』 中学三年生。

彼女は高校入試に向かっていている途中だった。

「どうしよう、どうしよう。」等と言いながら目に涙が浮かばせ試験会場に着いた。

数時間後

「……………」。

足下がおぼつかない七海が試験会場から出てきた。

彼女が試験に間に合ったのかと言うと…………間に合っていた。

しかも――

「ええっと…………今なんて…………。」

数時間前七海は信じたくない思いで高校の教員に聞き返してしまっ
った。

「ああーまだ試験開始一時間前ですが……。」

一時間の余裕を持って……

七海はさつき遅刻だと思って自身の限界を超えたスピードで走っていたというのに……

「はあー」と溜め息をつきながら七海は自宅へと向かっていた。

もうすることはなく後は春にある中学校の卒業式と合格発表待つだけのだが……

彼女には恋人はおろか親しい友人もない。卒業式にしても春、合格発表にしても春。

その間をどうやって過ごそうかと思うと少し涙が流れてきた……。

そんなことを思っていたとその時――

「わっ!」「きゃ!」

七海は誰かとぶつかってしまい転んでしまった。

「す、すみません……あの大丈夫ですか?」

七海とぶつかった人物はそう言って七海に手をさしのべた。

「あつ！大丈夫です！すみません。ちょっと、よそ見しちゃって…
…あなたこそ大丈夫ですか！？」

七海はさしのべられた手を持ち、立ち上がりながら相手の無事を確認する。

「お、俺は大丈夫です……すみません……ちょっと急いでて」

「ほ、本当に大丈夫ですか！？」

七海はぶつかってしまった相手をマジマジと見た。

身長は160半ばぐらい七海で166だから大体同じぐらいだろう。
いや、2、3センチほど七海より低いだろうか？

黒い髪の毛に多分自分と同じぐらいの年だろうか。結構端整な…
…格好いいと言うよりはやや可愛い顔立ちをしている。

服装は冬にしては薄い服装だ。

長袖のシャツの上に一枚羽織を着ているだけだった。

だが、七海が一番目を引いたのは右手に妙なマークがついたアタ
ツシユケースを持っていることであつた……。

「あ、あの………？」

中々、七海がマジマジと見つめるからだだろうか、少年はアタツシ
ユケースを見ている七海に心配そうに尋ねた。

「あ。だ、大丈夫です……」

七海は少年の掌を掴んで立ち上がった。

「本当にごめんなさい！本当の本当に急いでて……」

少年は七海に向かって何度も何度も頭を下げて謝った。

「だ、大丈夫ですよ。そう何回も謝らなくても……それに、急いでるんですよね？早くいきかないと……」

「で、でも………ほ、本当にすいませんでした！」

少年はもう一度頭を下げると大急ぎで走っていった……

七海はその後しばらく歩いていた。

「さっきの子ちゃんと間に合ったのかなあ……」

なんて、さっきの少年のことを心配していた。

ズガン！！

「な、何！？」

七海はあたりを見渡すと車が電柱に激突して、車からは運転手らしき人が鞆を持って出てきた。

だが、七海にはその運転手が持っている鞆に見覚えがあった……

「あつ、あのアタッシュケース……」

さっき出会った少年が持っていたのと同じものだった。その証拠に同じマークが付いている。

「ひっ！ひいい」

運転手の男は何かに怯えているようだ。

車の周りには周りには野次馬が集まってくる。

「どけ！！邪魔だ！！」

運転手は野次馬を押しわけここから立ち去ろうとする。

「えっ？ちょ、ちよつと！！」

七海は車を放置してどこかに行こうとする。運転手の前に立ちはだかる。

「あれはあなたの車でしょ！無責任ですよ！！」

「うるさい！！どかないと……」

男は懷に手を入れて……

「撃ち殺すぞ！！！」

と、拳銃を取り出した。

「えっ……ええええええー！？」

七海は思わず間拔けな声が出てしまう。

「解ったか！？、しかしおまえは殺す前に人……あつ！……わああああああああー！！！」

男はなにやら物騒なことを言おうとした瞬間、絶叫し。

「持ってる！！」とだけ言って、七海にアタッシュケースを押し付け逃げていった。

「へっ？」

「キャアアアアアー！！！」

「へっ？」

男の絶叫を聞きこちらを見た周りの人たちもさっきの男に負けない絶叫をあげ、一目散に逃げていった。

「どうしたんですか！？一体何を見た……………」

一体何を見たのか、と思い後ろを振り返ると……………

はさみのようなものを自分向かってに振り上げている怪物がいた。

「……………イヤアアアアアー！！」

七海は周りの人やさっきの男を完全に超えた絶叫を発した。

「フンッ!!」

怪物ははさみを振り下ろす

「きゃあ!!」

七海は間一髪よけ思いっきり逃げ始めた。

七海は怪物が驚いてる隙に一気にかけだした。

怪物たちはすぐに追いかけるがそんなに動きは速くないようであつという間に見えなくなつてしまった。

「ここまで来たら——キャッ!!」

七海は怪物が来てないのを確認するために後ろを見たらまた誰かにぶつかってしまった。

「すつ、すいません!!ちょっと急いでて……あつ!今怪物がいるから早くここから離れた方が——」その必要はない「えっ?」

七海がぶつかってしまった男は七海の言葉を遮った。

「なっ、何ですか!?!」

七海は思わずくっつかってしまった。

「何故?決まってるだろう。」

男はニヤリと笑い。

「俺がその怪物だからだ。」

そう言い次の瞬間男の姿がさっきの大きなはさみをしている手を持つ怪物に変わった。

「あっ……あ……あ」

目の前にいた人間がいきなり怪物に変わり七海は言葉を失ってしまった……

「さあ、そのアタツシケースをよこ——ぶわっ!!」

七海は怪物をアタツシケースで殴り再び全速力で走り出した。

（何なのあいつ等？コレをよこせて……でもこれさっきの男の人が持ってたのと同じ。あの男の人とコレを貰うはずだったあの男の子もあの怪物と関係あるの？）

「おいつ、いてーじゃねーか」

「……」

七海は驚愕した。さっきまで後ろにいたはずの怪物が今、目の前にいるのだから。

「そんな……!」

「はっ、お前らじゃ解んねーな——ジャンプしただけなんてよ——!!」

最も怪人態では重すぎるので人間態に一旦戻ったが。

「うつつ……あつ……」

前がだめなら後ろをと思い後ろを振り返るがああのウジャウジャした怪物も追い付いてしまっていた………

「さてとそのケースとお前の命を貰う」

七海はもう足がすくんで動けなくなってしまった。10体近くいるウジャウジャと大きなはさみをした怪物、もう駄目かと思った………その時

「はあ！」

かけ声が聞こえたかと思うと、ウジャウジャの内の一体が殴り飛ばされていた……

「えっ？」

そのかけ声は七海に聞き覚えのあるもので救い主の姿にも見覚えがあった。

「あれ？」

救い主は自分が助けた人物が誰か気付いたようだ。

「ちっきの……」

怪物が、忌々しい物を見るような目でドライバーと呼ばれた物を見た。

少年がそれを手に持つと帯が出てきてベルトとなり海翔はベルトを腰につけた。

少年はアタッシュケースに入っていたサーフボードのに円形の小型の機会が付いていてイルカの胸鰭のようなものが付いたプレートを出して……

「変身！！」

と叫んで、ベルトへ縦に差し込み90°回転させた。

《ride on》

電子音になり少年は波のようなエネルギーに包み込まれた。

「なななっ、何がどうなって。」

七海には目の前の光景が何がどうなってるかわからない。

そしてエネルギーが水飛沫のように散りそこに何かが立っていた

……………

「じっ、これは……！」

怪物はその姿を見て驚いていた。

黒い下地で水色のアーマーをつけていて、青いホーン部分もイルカや鯨の尾鰭のような三日月形。オレンジ色の複眼に口はギザギザと鋭いクラッシャーをしたイルカをモチーフにした仮面ライダーウエイブに……

「ライダーを破壊しろと、言われていたがプロトタイプのライダーシステム・ウエイブ・だったとはな……ふん、所詮出来損ないのシステムだ。行けお前ら」

はさみ怪人はウエイブにウジャウジャをけしかけた

「出来損ないか……」

ウエイブは銀と青の銃・ウエイブレイガンー・を取り出しウジャウジャに向かって撃つ

「クワァ!?!」

全員に命中して全員がひるみ、そこにウエイブがマルチブレイガンを銃のプラストモードから剣のスラッシュモードに変え切りかかる。

4体ほど居るウジャウジャ怪人はウエイブに向かって長い爪を出しウエイブに立ち向かうがウエイブはそれをかわし、4体のウジャウジャを何度も何度も切る。

「……………」

ウェイブは左手につけてる小型の機械・ウェイブローダー・を構えた。

ウェイブローダーを手でスラッシュ、《rider slash》と電子音が発せられる

ウェイブレイガンの刃に青いエネルギーがはしりそのままウジャウジャに突っ込んで行きすれ違いざまに切りつけて行く。

「ガッ……………」

切り裂かれた4体は 水飛沫のとなつて散り消滅した……

「ほお………… 4体のプランクウォーマを倒すとはな」

はさみ野郎が感心しながら近づいてくる。

「プランクウォーマ…………？」

七海は聞き慣れない単語に首を傾げ、はさみ野郎は続ける。

「プランクウォーマとはウォーマ達を基に生み出された人工生命体だ。だが知能や戦闘力は殆ど無いし、つがいを何組か放っておくだけであつという間に繁殖する。だから俺達は、戦闘員としてこき使っているわけさ」

はさみ怪人はプランクウォーマについて説明するが、七海が怪人の言葉を遮った。

「ウォーマって何？」

七海の疑問にはさみ怪人は答える。

「俺達ウォーマはもう一つの……ネガのこの世界からやってきた……」

「ネガ……？」

質問して答えて貰えば貰うほど疑問がわいてくる上に知らない単語ばかりが飛び交い、七海の頭脳が追い付かなくなってきた。

「随分喋っちまったか……。まあいい……」

だが、ウェイブはいきなりはさみウォーマに斬りかかった。

「ハッ！」

だがすぐにハサミでウェイブレイガンを受け止める。

「固いな……」

「当たり前だ！俺は蟹のウォーマだからな……！」

そして蟹のウォーマ・リバークラブウォーマ・はもう片方のはさみを振り上げるが……

《rider blast》

電子音がした途端マルチブレイガンがブラストモードになりウエイブがジャンプで後退して、青いエネルギーが集注しているマルチブレイガンの、引き金を引いた。

「なっ!!」

マルチブレイガンから青い光弾が発射されリバークラブを直撃した。

「ガアアア!!」

絶叫と共にリバークラブは思いつ切り吹き飛んだ。

「ふう・・・」

ウエイブはとどめをさすためにローダーの胴部分を引っ張ると、ガチャツとショットガンのポンプ音のような音が聞こえ《ride r blast》と電子音が鳴りブレイガンをリバークラブのへ構える。

「ガアアア!!」

「えっ？」

雄叫びを聞き、振り返るとリバークラブがもう1体いた。

「新手!?!」

ウェイブは新手にブレイガンを構えると……

「よそ見をしてる場合か!?!」

「!?!」

復活した最初のリバークラブがハサミをスイングする。

「わっ!」

とっさにかわすが、かわしきれずブレイガンを弾かれてしまう。

「あの武器がなけりやおそれることは――ブワッ!?!」

武器を失っているウェイブにリバークラブは襲いかかるが、そこにはウェイブの回し蹴りが命中していた。

「このっ!?!」

リバークラブもハサミを振り回すが、ウェイブは素早い動きで全て避けて連続でパンチをたたき込む。

「ちっ!素手の戦闘もイける口か!?!」

リバークラブは悪態をつき……

「てめー!?!その娘をぶち殺しておけ!?!」

リバークラブは援軍に七海を殺すように命令した。

「……………」

「そこまで落ち着いてられると気に食わねえなあ!!」

リバークラブは、はあつと溜息を付いてウェイブに突っ込んで来た。

「……………はあつ!!」

ウェイブは突っ込んで来たリバークラブに一発、蹴りをお見舞いしハサミを片方を両腕抑え込む。

「いくぞ……………」

ウェイブはリバークラブを突き飛ばし拳を構える……………するとウェイブの拳にエネルギーが集中してきた……………

「はあ!!」

ウェイブは拳にエネルギーを集中させたまま飛び上がり……………

「はあああ!!!!」

降下の勢いもプラスしたパンチをリバークラブに叩き込む。

「がああ……………!!!!」

パンチで吹き飛ばされたりバークラブはよろよろと立ち上がった
が次の瞬間に爆散した。

「ギアアア！！！」

もう一体のリバークラブがウェイブにむかってハサミを無茶苦茶
に振り回してくる。

ウェイブはそれを全て避けキックをかます。

そこにパンチを二発ぶち込みローダーのヘッド部分を押してから、
ベルトの右サイドのボタンを押す。

《r i d d e r k i c k》

電子音が鳴り、ウェイブは高くジャンプしてエネルギーを纏った
右足でリバークラブに跳び蹴りを放つ

ウェイブのキックがリバークラブの胸にヒットし当たった瞬間激
しい水飛沫が起こる。

「うあっ……、うおおおおお！！！」

激しく吹き飛び、立ち上がったリバークラブは殻が割れた胸を覗
かせながら、水飛沫のように散った……

海頼内某所

ここは何かの研究所の地下。そこにあるモニターには先ほどの戦いが映っていた。

「コレがプロトタイプのライダーシステム、ウェイブ……」

そこにモニターを見ている2人の中年ぐらいの男性がいた。

「はい。ですがしかし……」

その隣にいる男性が、先程の戦闘の映像を見て不思議がっている。

「何か気になることがあるのかね？」

最初の男性が訪ねた。

「ええ、ウェイブの装着者ですが何故この世界の人間がウェイブを……」

「なあに、これに関しては心当たりがある。君は気にしなくてもいい。」

「そうですね。あなたがそう仰られるのなら私は気にしないことにします」

男はそう言つと。「私にも目的がありますから……」

と言ひニヤリと笑つて去つていつた。

部屋には最初の男性が残つた。

「まさかここまで早くライダーが出現するとはな……フハハハハハハハ……」

部屋には男の笑い声が響きわり、こう呟いた。

「復讐の始まりだ!!! ウエイブ……いや、『大洋海翔』!!!」

波の戦子 ウエイブ（後書き）

前々からエブリスタに投稿させていただいたものを重複投稿という形で、投稿させていただきました。

下手な文才丸出しですが温かい目で見ていただけたらと思います。

後、この場を借りて人物紹介をさせてもらおうと思います。

いそがいなみ
磯貝七海

この物語の主人公

家族から虐待を受けているが一生懸命に生きている。性格は明るいがこれ過去の体験から無理に明るくしている。

主人公と銘打っているもののこの後は出番が無くなることもあるし読者視点キャラと言っても無理があるかもしれないし、更には仮面ライダーへの変身予定もありません。

「じゃあ、何で主人公なんだよ！！」って突っ込まれるかもしれないませんねえ・・・仮面ライダーに一切変身しない仮面ライダーの物語の主人公なんて・・・

ただ、作者が主人公要素ゼロの主人公を作りたかっただけなのかな？

まあ、次回はもう一人の主人公でライダーに変身する海翔の紹介を後書に書こうと思います。

では、皆さんさようなら・・・・・・・・・・（次元の壁が降りてきてそこ
に入って退場・・・）

家族 ファミリー

午前6:00

ここはかなり裕福な家庭の一軒家の中。

そこに1人の少女が部屋で眠っている。

目が覚めると目の前には天井があつた。体を起こそうとするが起き上がれない。

「あれ？」

七海はやっとのことでベッドから体を半分起こした。

「ええと……」

七海は何故今ベッドで寝てるかを考えた。だが熱があるせいで、

頭が回らない。

「確か入試を受けて……」

入試を終えた後の自分の足取りを賢明に思い返す。

「確か……」

少年に会って、怪物にあって、少年は変身して……怪物を倒して

……

「違う！違う！」

七海は頭を振った。怪物に出会うなど空想の話だ。と思って昨日のことをもう一度振り返るが……

「あれ………」

どうしてもSFめいた記憶しか浮かばない。

「っていうか、私どうやって家に帰ったんだろ？」

そして何故自分が今ベッドにいて、どうやって帰ってきたかの記憶がない……

「夢だったのかな？」

夢にして夢の内容をハッキリ覚えている。怪物たちはウォーマと言いまう一つのこの世界からやってきたらしい……そして怪物を倒したのは少年が変身したウェイブと呼ばれた戦士だった……

「怖い夢ほど記憶に残る」とはよく言われるが……

ベッドから出て自分の机を見ると処方箋がおいてあった。

「……いつ病院に行ったんだっけ？」

確かに自分の体調は最悪だ。だが、今起きたばかりで病院には行っていないはずなのだが……

とりあえず何の薬なのかを調べるために、七海は薬を取り出した。すると中に手紙が入っていた。

「ええと……」

薬ちゃんと飲んでください。

後、巻き込んでしまつて本当にごめんなさい。

大洋海翔

七海は名字が名前みたいな少年からの手紙を読み、薬を飲もうとすると『食後』と書いてあった。

「……………」

七海は一瞬悲しそうな目をし一階の居間に降りた。

「おはよう………」

『おはよう』と言ってみる。が、返事はなかった。

「そっだよね……………」

七海は部屋に戻って着替えるとしんどい体を引き摺って出かけてしまった。

七海は街を朝食を買うために歩いている。七海に両親はいる。

だが、養護施設から引き取った義理の娘ばかり可愛がり七海に愛情は注がない上に家事なども全て丸投げしている。

ご飯は七海だけがインスタントやコンビニ弁当だけで済ませて、自分達は手料理か外食を食べているのだ。そして、虐待もうけている。

「しょうがないよね……………」

七海は自分に言い聞かせるように言った。これは宿命なのだと変えることは出来ない。生き物がいつか死ぬのと同じことだと。

だが、一度で良いから手料理という物を食べてみたい。愛情がこ

もっており、物理的な意味ではない温もりのこもった料理を食べた
いという思いが彼女の心の中に強くあった。

「おーい！」

その時突然声がした。

「あ、あなたは、昨日の……」

突然声をかけてきたのは海翔だった。人のことを言えないが何故
こんな時間に外にいるのかが不思議だった。

「昨日はごめんさい。俺のせいで巻き込まれてしまって……」

「気にしないでよ。運が悪かっただけ。」

「後、その……」

海翔は決まり悪そうにある物を七海に差し出した。

「これは……」

海翔が差し出したのは七海の生徒手帳だった。

「ごめん。悪いとは思ってたんだけど………家に運ぼうと思ったと
きに身元が分かるものがないかな？ってカバンを物色したりしちゃ
って……それでこれ見つけたんだけど間違えて持って帰っちゃって
………」

海翔も女の子のカバンを物色するのは流石に気が引けたのだろう。

「てことは、君が私を病院に連れて行ってくれたの？」

「うん……」

「ありがとう。おかげで助かったよ」

「本当？それなら良かった……ん？」

海翔は気付いた。今、少しばかり状況がおかしいことに。

「……こんな時間から何してるの？」

昨日熱を出した女の子がこんな朝早くから街をうろろろしているのだ。

治ったとしても病み上がりの人に無理をすればまたぶり返してしま
うかもしれない普通は大事をとって休ませた方がいいものなのだが
……

「えーと。あ、朝ご飯を買いにちよつとね……」

（……ごまかせたかな？）と思いながら海翔の顔を見る。朝ご飯
を買いに来たのは事実なので『ごまかす』と言う表現は違う気がする
が……最も七海が深く追求されたがってないのは事実だが。

「あつ、そうなんだ。俺が言うのもアレだけど……お大事に。」

「ありがとう。じゃあね。（良かった）」

海翔は黙って去っていったが……

「……有り得ない。病み上がりなのにに出かけた理由が朝ご飯を買いにきた？俺も朝ご飯かいにきたけど……」

感ずいていた――

「――何だったろ、あの子の両親のあの『感情』は……」

――七海が知られなくなかつ域さえも一回りほど越えたところにまで

数分後

海翔は自分が住ませて貰ってるレストラン『喫茶・TAIYOU』についた。

ちなみに、レストランなのに何故『喫茶』とついているかは海翔も知らない。『TAIYOU』とは、元々店は姉の両親の店だったからだ。今は母の弟が経営している。

姉の両親は姉が小さい頃に亡くなって、母の弟に引き取られた。

海翔は店の中へ入った。

「ただいま」

「あつ、おかえり！海翔」

海翔が中にはいるとすぐ、姉の『大洋 海花』（たいよう うみか）がいた。

「ただいま、お姉ちゃん。おじさんは？」

「お客さんがいるから、厨房で料理作ってるわ」

「珍しいな、こんな朝早くに……」

店自体は開店しているが実際にこの時間から来るお客さんは珍しい。

海翔はお客さんの方を見た。

「……！！」

なんとお客は七海の両親と、後一人は見知らぬ少女だった。

「海翔……？」

海花が海翔の顔をのぞくと海翔の顔がこわばっていた。

「海翔、どうかした？」

「！……なっ、何でもないよ」

「ふーん……」

海花はジーと海翔の顔を見ている。

「……………」

海翔は無言のまま海花の顔を見つめる。

「ちょっと、注文聞きに来てくれませんか」

静寂だったところに、七海の両親と一緒にいる少女が海花を呼んだ。

「あつ、はい。」

海花は返事をする、海翔の方を見て。

「悩みとか不安があるなら言ってよね」

海花はそこまで言う、と海翔の耳元に顔を寄せ、

「私達は家族なんだからね」

と囁いて顔を離して、

「無茶はしないでよ。」

と言いながら海翔の髪をクシャクシャつとした。

「……う、うん。」

返事を返した海翔の顔は僅かに赤くなっていた。

「ね、姉ちゃん……」

「なに？」

「あ、ありがとう……」

海花は海翔に微笑むと客のところへ行った。

——一時間後

「ちょっと……やめてください……!」

店外で海花が男ともめていた。

「おねがいだから、お話だけでも」

その男は、チャラチャラしていた。

「いやです……!前、お話聞いただけでも酷い目に遭いました……!」

「いいじゃないか、さあー僕と一緒に——グフツ……!」

そのときチャラ男『茶羅 名流志』の頭に衝撃が走った。

「姉ちゃん、大丈夫!？」

海翔だった。海翔が持ってきた壺で茶羅の頭を殴ったのだった。

「大丈夫……ありがとうー海翔。」

海花は海翔の後ろへまわる。

「なっ、なにするんだい弟君。未来の兄——グワッ!？」

茶羅が最後まで言い終わる前に海翔は、まるでライダーキックのような跳び蹴りで茶羅を吹っ飛ばした。

「来るならー昨日に来い!」

海翔は今度は壺を開けて、塩を茶羅に投げ始めた。

「ぺっ!ぺっ!この糞がき!!覚えて——ブワッ!!」

捨て台詞を吐こうとしたところを海翔は壺の中身を全部茶羅にぶちまけて、茶羅は逃げていった。

「全く……お姉ちゃん大丈夫?」

海翔は自分の後ろにいる姉を見た。

「うん……いつもありがとう。」

「気にしないでくれよ、お姉ちゃんのためだから。」

海翔は茶羅が押し掛けてくる度に毎回『強制排除』を行使している。

「……………はあ、疲れちゃったな。」

海花はそういいながら体を伸ばした。

「まだ、さっきお店開けたばかりだよ。」

海翔も姉と動きを合わせて体を伸ばした。

「ほら、さっきのお客さん。マナー悪いし、特に娘さんは一人娘だとか言って甘やかしすぎよ。」

「えっ?」

「全く近頃の大人は……………はあ、店に戻ろっと。」

海花は店内に戻っていった。

「一人娘って……………んなワケ無いだろ。」

海翔は愕然としていた。勿論今日ここに來た七海の両親の家族についてだ。

もう一人の娘については何も分からないが、七海の両親は七海の

ことをもはや家族から除外しているのだろうか？

何故、親が娘に対してこんな仕打ちをするのか？

海翔は今度七海に会って理由を聞こうと思った。何故だか分からないが海翔には放っておいてはいけないというきがするのだ。

「海翔ー！何してるのー？」

店の方から海花が呼んでいる。

「あ、ごめん！いま戻るよ！」

海花の声で海翔は我にかえり店の中へと戻ろうとした。

――が、

海翔は感じた。どんなウォーマが居るのか、そのウォーマの居る場所、そしてその場所への道のりを……………

「姉ちゃん！おじさん！俺、ちょっと行ってくるー！」

海翔は店から出ていった。

「海翔……………」

海花も立花もどこに行くかは聞かなかった。彼がライダーとして戦うことは知っているから……………市街地。

街では10体を越えるプラंकウォーマが暴れており、人々は悲鳴をあげて逃げ回っていた。

「撃てっ！」

警察の機動隊が、プラंक達に立ち向かうがプラंक一体に何人もが迎え撃たなければならない状態だった。

「くそっ！」

わかい私服警官が、プラंकに向かって拳銃を放っていた。

「カッ!!」

だがプラंकの一撃により拳銃を弾かれてしまう。

「くっ…………くそおお!!」

警官は武器を失ったまま殴りかかるがプラंकに殴り飛ばされてしまう。

「グワッ!!…………痛う…………」

警官は前を見た。するとさっきとは別のプランクが3体、じりじりと迫ってきた。

（た、立たないと……）

だが足を痛めたのか動けない。

（ここまでか……！！）

警官は死を覚悟した。その時——警官の横を誰かが駆け抜けた。その人は見たところ一般人で15、6歳ぐらいの少年で服の上に銀のベルトをつけていた……海翔だった。

「お、おい！ なっ、なにしてんだ！」

警官の言葉に反応も示さず海翔はライダープレートを保ルトに装着する。

「変身！！」

警官は目を見張った。少年を波のような物が覆い、波が散ったときには全く別の姿になっていたからだ。

「なっ……！！」

ウェイブはローダーのヘッド部分を押し次にベルトの右サイドのボタンを押した。

《rider kick》

電子音が発生され、ウェイブは飛び上がりそのままプラंक達に向かって跳び蹴り・ライディングウェーブ・を放った。

ライディングウェーブは3体のプラंकを一気に吹き飛ばした。

『ガアアアアア！！』

プラंकは絶叫をあげ水飛沫のとなって散った。

「す、すごい……」

警官はウェイブの戦いに感嘆の声を上げる。

ウェイブはブレイガンをブラストモードにしてプラंक達を撃つ。

《r i d e r b l a s t》

ウェイブはローダーの胴部分を引っ張り。ライダーブラストのエネルギーをブレイガンにチャージしてプラंक達の群に突っ込んでいく。

プラंक達もそれを見てウェイブに突撃して行く。

「ハア！」

するとウェイブはかけ声と共に大きくジャンプし空中で一回転でプラंक達の反対側に着地して、ブレイガンの引き金を引いた。

ブレイガンから青い光弾が発射され、発射された青い光弾はプラ

ンク達の群を一掃した。

ウェイブはプランクウォーマ達が、消滅したのを見ると背後をみた。そこには体がものすごく発光しているプランクウォーマがいた。

「……ギヤアアア!!」

雄叫びとともに、体がどんどん変貌していく……。

「進化した………」

プランクウォーマはプランクトンをモチーフにして、ウォーマの細胞から作られた人工生命体だがまれに進化する。

今、ウェイブの目の前にいるマッドクラブウォーマがその例だ。

「ライダー、タオス」

カタコトではあるが言葉を発したウォーマ、ウェイブはそれを聞いて少し悪態をついた。進化しても知能も同時に上がるタイプは更に厄介なのだ。ウェイブはブレイガンでマッドクラブを撃つがマッドクラブは怯みもせず角を突き出し突進してくる。

ウェイブはブレイガンをスラッシュモードに変えマッドクラブの角を受け止めた。

だがマッドクラブのパワーがウェイブを押している。

「こゝこの野郎……」

必死に踏ん張るウェイブだが……

「ハ……」

「うわっ！……」

「ハアアアア……」

次の瞬間マッドクラブは角を思い切り振り切った。当然ウェイブは……

「わあああ！あああ……」

吹き飛ばされて……

ベシヤッ！！

「うがっ！……」

電柱に叩きつけられてしまう

「いてて……この野郎……」

ウェイブが武器を構えなおしたそのとき！

ガン！！

「痛っ!!」

ウェイブが先程叩きつけられた電柱が折れてウェイブの頭に直撃したのだ……………

「ふ、不意打は卑怯だろ!」

ウェイブはマッドクラブに文句を言った。

「不意打ちじゃないだろ、今は……………」

ウェイブは警官にツッコまれながらもブレイガンをスラッシュモードにし、マッドクラブを切りつける。

「ガアッ!」

マッドクラブが気合いをいれるとマッドクラブの手がはさみに変わった。

「かなり知能の発達が早いな……………」

ウェイブははさみを受け止められるとそのまま後退した。だがマッドクラブははさみを振り続け、ウェイブはそれをかわし続ける……………

ダンッ!! ダンッ!!

いきなりマッドクラブに銃弾が当たった。

ウェイブとマッドクラブは銃声がした方を見た。

さっきの警官がマッドクラブにむかって発砲したのだった。

「か、かかってこい！ば、化け物！」

警官は力いっぱい叫んでいた。

「……コロす！」

マッドクラブは警官にむかって突撃を始めた。

（死んだー！！）

警官は目をつぶろうとした——が、警官の前にウェイブが駆け込んできた。

「……」

警官の前に立っているウェイブの手には刃を短くしたブレイガンが握られていて……………

「ハアッ！！」

それを思いっきりマッドクラブに投げつけた。

「！！！」

ウォーターバックは反応するが間に合わず投げマッドクラブはブ

レイガンの刃に切りつけられた。

《r i d e r k i c k》

いきなり電子音がなりマッドクラブは電子音がなった方を見ると目の前にウェイブが迫っていた。

ウェイブはエネルギーが集中している右足でウォーターバックに蹴りを入れた。

「ガアアアアアア!!」

マッドクラブは吹っ飛んだが、エネルギーを纏った足で普通にキックしただけだったからなのか爆散せずにフラフラと歩き始めた。

「あっ、待て!!」

ウェイブはマッドクラブの吹っ飛んだほうへいったがそこには既にマッドクラブの姿はなかった……

「……………」

ウェイブはベルトを外し海翔に戻る。

「あっ!!」

海翔が基の場所に戻ってみると警官が目を回して気絶していた。

「ちょっと!?!しっかりしてください!!大丈夫ですか!?!おーい起きてください!!」

海翔はその後救急車を呼び救急車が到着して警官が救急車に載せてもらったのを確認しその場を去った。

「ただいま」

場所は変わってレストラン『喫茶 TAIYOU』

「おかえりなさい。」

海翔が店に入ると新聞を読んでいた海花が海翔を迎えた。

「ただいま姉ちゃん。……………ごめん少し寝かせて。昨日から色々ありすぎて疲れたみたい……………」

海翔はよほど疲れたのか、そのまま倒れ……………

「おっと、っと……………ナイスキャッチ……………」

……………倒れ込んだのを海花が受け止めた。

「もう……………まだまだ子供だなあ」

海花は自分の胸で寝ている弟の頭をそおつと撫でた。

海翔は怪物と戦つていようと血の繋がりが無かろうと海花からしたらただの可愛い弟なのである。

そして海花はこのように海翔から甘えられるのが嬉しいのだ。

だが、なにより……かけがえのない家族なのだ。

海花はそんな海翔には戦ってほしくなかったのだが――

――だが海翔は自分が戦うことを受け入れた。

だけど海翔にも辛い記憶があるらしい。

海翔はどうしても教えてくれないことがあるのだ。

しかし海花は海翔が自分から話してくれるのを待つことに決めた。

海翔を支えよう、海翔が自分を姉と呼ぶ限り彼の姉でいると海花は決めた。

「海翔……」

海花は海翔を一層強く抱き締めた……………

家族 ファミリー (後書き)

たいようかいと
大洋海翔

この小説の主人公でウェイブに変身する少年
性格は優しく家族には自分の弱い面を素直に出し特に姉には甘えた
りもする

年齢15もつすぐ16にする

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7325z/>

仮面ライダーウエイブ

2011年12月24日13時48分発行